

自分らしく、よりよく生きようとする子どもの育成

— 道徳的に判断することに着目して —

小 学 校 石 崎 正 人  
 研究協力者 杉田 浩崇 (愛媛大学)  
 宮脇美智代  
 (愛媛県教育研究協議会)

1 主題設定の理由

よくこんな話を耳にする。わざわざ道徳の学習をしなくても、ふだんの学習や体験活動の中で、道徳的価値について触れる機会は数多くあるから、それで十分である。道徳的価値が大切であることはある程度理解できているから、それより教科等の学習の時間に充てたい。果たしてそうだろうか。道徳科は、他の教科等のように新しい知識を獲得していく学習とは違って、これまでに持っている自分の価値観について、一度立ち止まって改めて考えていく学習である。道徳科の学習を通して、ねらいとする道徳的価値について改めて理解することができる。価値について大切であると分かっているにもかかわらずそれが実践できない弱さが人間にはあることも分かる。他者の考えに触れ、人それぞれいろいろな価値観を持っていることを知ることができる。それを踏まえ、自分はこれからどうしていきたいかを考えていく。

このように、自分と向き合い、生き方について見詰め直し、じっくり考えていくことが道徳科の意義の一つであるといえる。これは、今後生きていく中で出会うであろう課題に対して、「できるかもしれない」「こうしてみたい」と思えるような〈自己効力感〉が高まる学びにつながっていくと考える。

そこで、「よりよく生きようとする」ためには「道徳的に判断する」ことが必要であると捉え、研究を進めたい。判断をするときに、自分のことだけを考えていたのでは、独りよがりなものとなってしまう、決してよりよい判断とはいえない。自分と自分自身や「人、もの・こと」とのつながりの中で生活をしていることを踏まえた上で、自分だったらどうするかを道徳的に判断する子どもを育てたいと考え、本主題を設定することとした。

2 〈自己効力感〉が高まる道徳科の授業づくり

(1) 道徳科における〈自己効力感〉が高まっている姿

道徳科において大切にしたいことは、問題を「自分ごと」として考えることである。問題を自分のこれまでの経験を踏まえて考えることで、道徳的価値について実感を伴って理解することができる。それにより、実生活に結び付き、道徳的実践へとつながっていく。三つの場面で〈自己効力感〉が高まると次のような姿が現れてくる(図1)。

場面	〈自己効力感〉が高まっている姿
出 合 い	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 問題に対して、疑問を感じたり考え直そうとしたりしている。</li> <li>○ 自分の生活を想起し、問題について考えてみたいと思っている。</li> <li>○ 自分のこれまでの経験から問題に対する考えが浮かんでいる。</li> </ul>
追 究	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ なぜそう考えたのかという根拠が明らかになっている。</li> <li>○ 自分が持ち得ていない価値観に出会い、考えを広げ深めようとしている。</li> <li>○ 多様な価値観に触れ、道徳的に判断しようと考えている。</li> </ul>
振 り 返 り	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 自分の内にある「よりよく生きよう」という思いに気付いている。</li> <li>○ 道徳的価値の大切さを再認識、再確認できている。</li> <li>○ 実生活に生かしていきたいという思いを持つことができている。</li> </ul>

図1 三つの場面における〈自己効力感〉が高まっている姿

〈自己効力感〉が高まってくると、目指すべき自分の姿を見据えて、価値観が広がっていくとともに、できることをしようという「よりよく生きたい」という思いが膨らんでいく。「よりよく生きる」ための原動力となるものが〈自己効力感〉である（図2）。

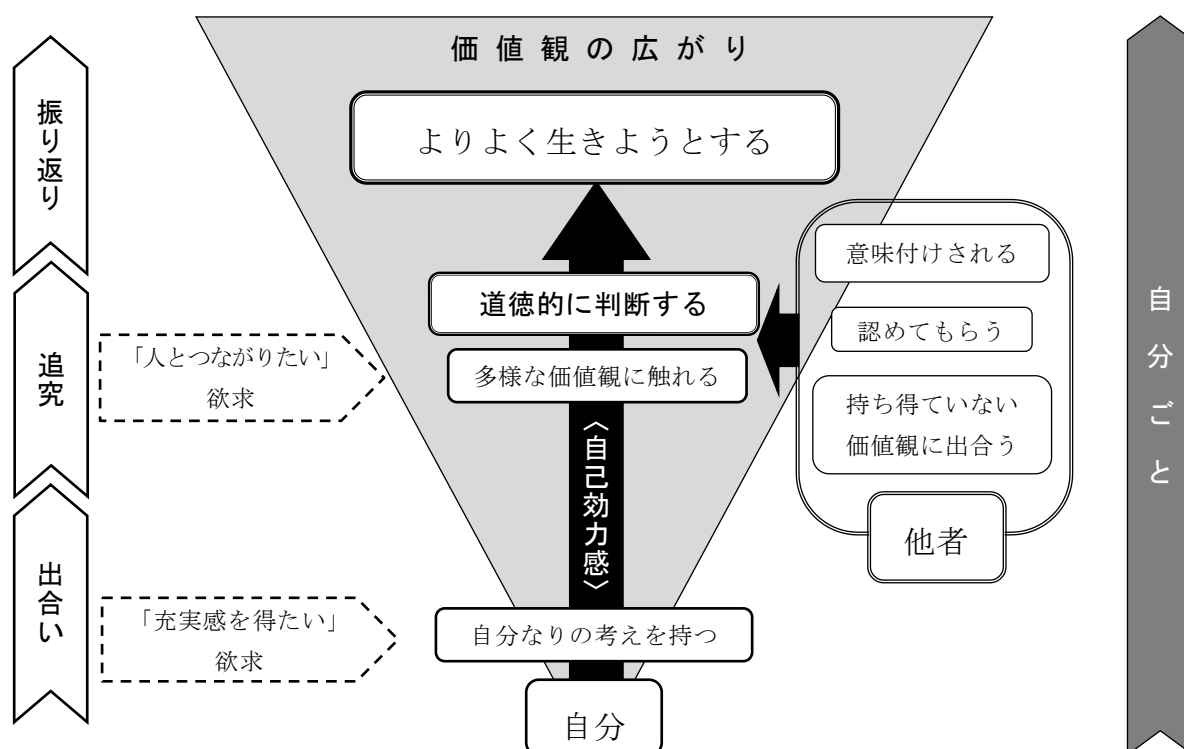


図2 道徳における〈自己効力感〉が高まっていくイメージ

## (2) 〈自己効力感〉が高まる指導と評価

### ア 「出会い」の場面

「出会い」の場面では、問いに対する自分の考えを持つことが大切である。そのために、「充実感を得たい」という欲求を満たせるよう、子どもがこれまで持っている価値観を問い直すような発問や資料提示を工夫し、自分のこれまでの経験を思い浮かべて、その時の自分なりの考えを持てるようにする。評価については、「問題について考えてみたい」「他の人はどう思っているのか知りたい」といった様子を見取るようにする。

### イ 「追究」の場面

「追究」の場面では、多様な価値観に触れる中で、自分だったらどう判断するのかを考えることが大切である。そのために、「人とつながりたい」という欲求を満たせるよう、「自分の考えが認められた」、「意味付けされた」といった互いの思いや考えを尊重しながら話し合いを行う。必要に応じて思考ツールを活用し、多様な考えを引き出し、持ち得ていなかった価値観に出合えるようにする【拡散】。そして、関連する考えをまとめていく中で、自分の納得できる考えを持ち、道徳的に判断することにつなげていく【収束】。評価については、どうしてそう考えたのかといった根拠や、「なるほど」、「そんな考えもあったのか」といった様子を見取るようにする。

### ウ 「振り返り」の場面

「振り返り」の場面では、学習したことの意味や価値に気づき、実生活へつなげたいという思いを持たせることが大切である。そのために、「自分の中に大切にしたいという思いがあることに気付いた」、「そんな考え方もあるんだということが分かった」、「これからどうしていきたいかという方向が見えてきた」といった思いを持てるようにする。評価については、子どもの発言や道徳ノートを中心に見取っていく。学習を通して思ったことなどの記述から、以下のような視点で子どもの姿を見取る（図3）。

- 問題について、多面的・多角的に考えようとしているか。
- 問題を自分ごととして捉え、道徳的に判断しようとしているか。
- これまで持っていた価値観が広がってきているか。

図3 道徳ノートを見取る際の視点

学習で思ったことを自由に書くだけでなく、子どもに書く視点を示すことで、ねらいとする道徳的価値に対してより深く考えていくことができるようにする(図4)。

- これまでの経験を思い出し、道徳的価値と照らし合わせながら振り返る。
- ある場面を提示して、そのとき自分だったらどうするかを考える。
- 学習を通して、疑問に感じ更にみんなで話してみたいことを考える。

図4 子どもが道徳ノートに書く際の視点

### (3) 教科等横断的な単元の構想

道徳科は、他教科等との関連が大きい。ゆえに、教科等横断的な単元の中に道徳科を位置付けて構想することが多い。〈自己効力感〉が高まる学びにしていくためには、道徳科の授業だけでなく、日常生活や様々な教科等の関連を踏まえ、単元を構想していくことが大切である。

道徳科における学習内容とは内容項目であり、資質・能力とは道徳性と捉える。低・中・高学年の発達段階に応じて系統的に単元を構想していくことはいうまでもない。道徳科では、これまでも内容項目との関連を踏まえた総合単元的な構想が行われてきた。これは、**C学習内容との関連性を重視**したものである。このような考え方を、**D資質・能力の関連性を重視**に発展させていきたいと考えている(図5、図6)。

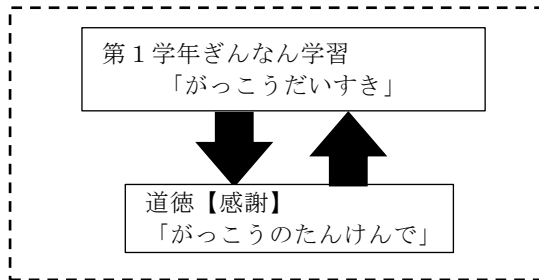


図5 接続型の単元構想の例

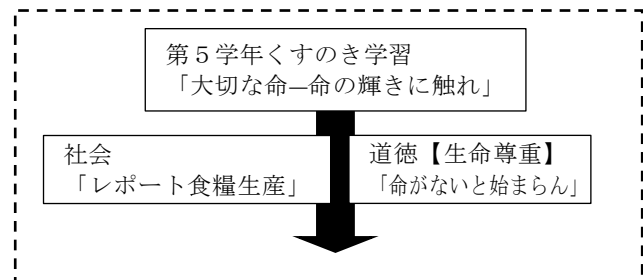


図6 プロジェクト型の単元構想の例

接続型の例では、ぎんなん学習「学校探検」において、「自分の思いや願いを持って身近な人と積極的にかかわる」という資質・能力を育んでいくという目標がある。道徳科では、「学校にはみんなのために働く様々な人がいることを知り、よりよくかかわっていこうとする心情を育てる」という目標がある。それぞれ「人とかかわる」という視点で関連を図ることができる。

プロジェクト型の例では、くすのき学習において、「命」という視点で自分の生活を改めて見詰め直したときに、自分を取り巻くあらゆるものに「命」がかかっていることに気付き、それをこれからの自分にどう生かしていくかを考えていく。生活のあらゆる場面で「命」とのつながりを意識していくことで、より深い学びを実現することができる。

ツーステージ型の例では、1年生「かぼちゃのつる【節度・節制】」の学習で、みんなから注意されると逆にもっとやりたくなるとか、わがままをし始めるとなかなか自分でブレーキをかけることが難しいなど、普段の生活場面を想起して、それでもわがままをしない自分になるためにどうすればいいかについて、サークル対話という形で話し合うことが考えられる(図7)。サークル対話では、椅子をサークル上に配置して話をするため、普段の授業に比べて子どもたちで話し合いを進めやすい雰囲気が生まれる。多様な考えに触れ、自分の価値観を再認識する上で有効な場である。

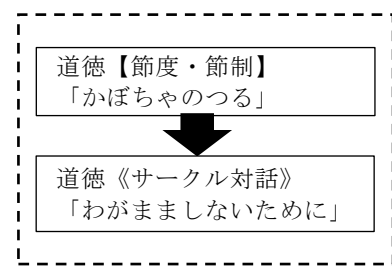


図7 ツーステージ型の単元構想の例

(石崎 正人)

# 愛媛附属小 道徳科授業づくり

